



農作業に汗を流す塩飽さん。地域のひとたちと知恵を出し合い、さまざまな商品を開発している

えていた。手入れが行き届かない土地は荒れ、生まれ育った故郷はすさんで見えた。「地元をなんとか元気にしたい」。そう考えた塩飽さんは、もともと農家だった実家の農地を利用して、会社勤めの傍ら「塩飽農園」を始めることに。使われなくなっていた周辺の農地の持ち主にも声を

隊員時代が人生を楽しくしている

また、塩飽さんは「農業の大切



エチオピアで見直した「食」の重要性

岡山県からローカル線で約1時間。県の南西部に位置する井原市の山間部で農園を運営する塩飽康利さんは、今から28年前、アフリカにいた。小学生の時、スエズ運河やパナ

マ運河を築いた偉人の話を知り、「いつか自分も海外で働きたい」と憧れた。転機は25歳。「挑戦するなら今だ」と動いていた建設会社を辞め、3度目の正直で青年海外協力隊に合格。土木の技術を生かし、エチオピアで農業用水路の整備などに携わった。「何か役に立ちたいと思って行



エチオピアの隊員時代。測量や機材の使い方など、試行錯誤しながら現地の人と一緒に土木工事に携わった

ったけれど、教えられることの方が多かった」と振り返る塩飽さん。工期なんて気にしない、そんな現地の人々の感覚に驚くこともあった。しかしそこには、異なる価値観を受け入れてこそ見えてくる世界があった。100万人以上が餓死するほど飢餓が深刻化していた1980年代のエチオピアでは、

農業で日本を元気に

青年海外協力隊員としてアフリカに赴任したのは1980年代。塩飽康利さんはエチオピアで農業土木分野の支援に携わり、帰国後、地元・岡山で地域を元気にする農園の活動を続けている。

さを伝えたい」と、農業を担う若手の育成にも力を注ぎ、農業に興味を持つ日本の若者に栽培方法を指導したり、こんにやく作りなどの体験を通じて食品加工の魅力を伝えていく。その他にも、高校生のインターシップや、本業の会社を通じてアジアの研修生の受け入れなどを続けている。

ポランテアで緊急支援を行う「ももたろう国際救援隊」のメンバーでもある。国際貢献先進県を目指す岡山県の事業の一環で設立され、地震や津波、台風などの被害を受けた国内外の被災地で救援活動に取り組む組織。東日本大震災の後は、塩飽さんも東北の被災地に向かい、物資配布などの支援活動に携わり、災害時の緊急支援の必要性と難しさを実感したという。

新しいことをすると、難しい壁にぶち当たることがある。しかし隊員時代に培った何事にもあきらめずに挑戦する粘り強さと、さまざまな分野で活躍する隊員仲間のネットワークに支えられて、大変なことでも楽しみながら乗り越えてきた。

今や1・7ヘクタールほどにまで広がった農園。そこで採れた野菜や果物を使って、地域の人々と一緒に開発してきた商品は数十種類に上る。近所のおばあさんが健康のためにと作っていたウコンを

隊員が自分の食料を確保することさえ簡単ではなかった。「食」の重要性を実感しました。帰国後は井原市に戻り、当時、世界最先端技術ともいわれた半導体の関連会社に就職。ロボットの組み立てなどの仕事で再スタートしたが、地元では、農地の担い手不足などが原因で耕作放棄地が増



岡山県
from Okayama



【右】地元の高校でエチオピアでの経験や世界の食料問題について話す塩飽さん
【左】「ももたろう国際救援隊」の活動の一環で、台風被害を受けたフィリピンに物資を輸送